

中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察

—理論と実践の往還の視点による事例検討—

川上 知子

要旨：本稿は、筆者の過去の生徒指導に関する教育実践を一つの事例として「理論と実践の往還の視点」で振り返ることで、今後の「生徒指導」の在り方について検討し、将来教師を目指す学生の参考書の一つとなることを期待して執筆した。小・中学校ともに学習指導要領(平成29年告示)解説総則編において、「生徒指導の充実」の項が単独で明示された。子どもたちを取り巻く状況が多様化する中で、学校教育における「生徒指導」は、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図ることを目指す教育活動として、これまで以上に意識化された中で行われる教育実践といえよう。しかしながら、「生徒指導」について学生に回想させると、「予防的な指導」と「課題解決的な指導」の2つを目的とした生徒指導が刻印付けされている傾向にあった。最も重要視すべき「成長を促す指導」を目的とした生徒指導の在り方について、具体的な実践事例を踏まえた検討を行った。

キーワード：生徒指導，成長を促す指導，予防的な指導，課題解決的な指導
理論と実践の往還

1. 問題と目的

平成20年告示の小学校学習指導要領では、「学級経営と生徒指導の充実」と一括りに述べられていたが、学習指導要領(平成29年告示)解説総則編では、小学校、中学校ともに「生徒指導の充実」の項が単独で明示されている。(資料1)

生徒指導を充実させることの必要性を裏付けるものとして、「平成30年度生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」(令和元年10月17日)の結果の概要を示すと、小・中・高等学校における学校の管理下・管理

生徒指導の充実(第1章第4の1の(2))
(2)生徒が、自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、有意義で充実した学校生活を送る中で、現在および将来における自己実現を図っていくことができるよう、生徒理解を深め、学習指導と関連付けながら、生徒指導の充実を図ること。

(資料1)中学校学習指導要領(平成29年)
解説総則編「生徒指導の充実」

下以外における暴力行為の発生件数は72,940件(前年度63,325件)、また、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は543,933件(前年度比414,378件)、小中学校における不登校児童生徒数は164,528人(前年度144,031人)といずれも増加傾向にある。そして、最も深刻な結果として、小・中・高等学校(学校から報告のあった)における自殺した児童・生徒数は332人(前年度250人)であり、この数は、昭和49年から現在までの調査において過去最多となっている。これらの結果は、生徒指導の充実に明示されている内容の中でも特に、「自己の存在感を実感する」という部分の重要性とそれを明

確に意図した教育実践の継続した取り組みの必要性を示唆していると考えます。そこで、本稿は、上記の生徒指導上の諸問題の現状を踏まえ、生徒指導の充実、特に「自己の存在感の実感」を柱とした教育実践を継続して行っていくために、具体的にどのような教育実践が考えられるのか、生徒指導提要に示されている理論の視点で筆者の実践事例を考察することで、今後の生徒指導の実践の在り方について検討することを目的とする。

2. 生徒指導の実際～学生の回想結果に基づく考察

右の図1は、2020年前期の教育学の授業を履修していた学生192名に、「印象に残っている生徒指導」について自由記述で回答してもらった結果をAIテキストマイニング（株式会社ユーザーローカル）というフリーソフトで簡易的に解析した結果を示したものである。

記述内容で頻度の高かったものは、フォントサイズと比例しており、他の単語との関係性が高いものほど中心に配置されている。（品詞によって色が異なっている。）簡易的に示されたものであるが、学生自身に印象的に残っている「生徒指導」の概要をつかむことができる。学生の実際の記述で多かったものの典型例として、学校の校則に纏わる指導（服装検査、頭髪検査等）や何らかの問題行動が見られたあとの集会などどちらかというとなegativeな印象をもった記述が見られた。ただ、補足すべき点として、上記のような指導もまたその方法、場の持ち方等は工夫は必要であるが、生徒指導が担う役割の一つであることは押さえておきたい。しかしながら、生徒指導が本来目指すべき姿が、上記の予防的な生徒指導で完結してはならないこともしっかりと押さえておきたい。

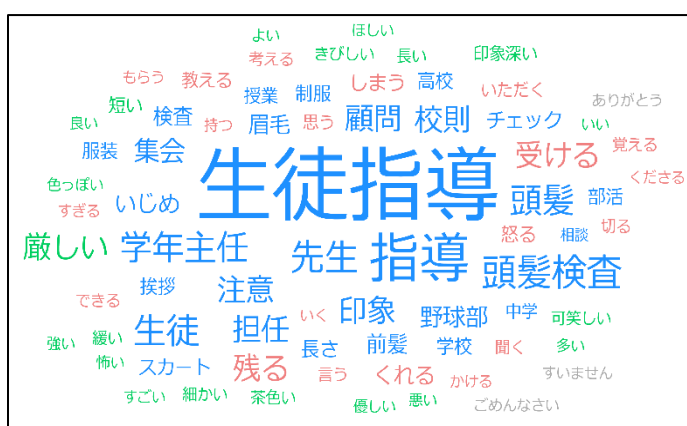


図1 印象に残っている「生徒指導」について

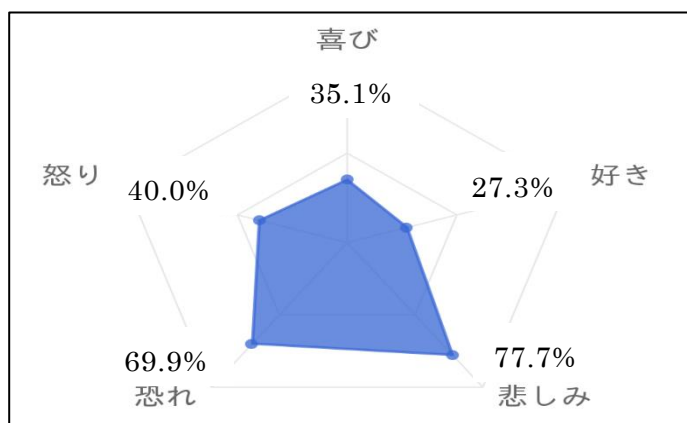


図2 「生徒指導」に抱く「感情」分析

そして、図2の結果は、とても衝撃的な結果といえよう。同一のソフト

（株式会社ユーザーローカル）で、自由記述の文章に含まれる各感情の度合いを数値に換算した結果である（各感情の数値は、全ての感情の平均値を50%とした偏差値）。学生たちが受けてきた生徒指導が、「恐れ(69.9%)」と「悲しみ(77.7%)」をもたらしているという現実を、どう解釈すべきか。当然ながら、恐れと悲しみのある中で、生徒たち一人一人が「自己の存在感を実感できる」ことは、難しいと言っても過言ではない。簡易的な解析による結果であるとしても、この結果を、生徒指導の在り方を検討する一つのヒントとして

受け止め、改めて、生徒指導の意義について整理したい。

3. 生徒指導の意義について

生徒指導の意義について振り返る際、一番身近でかつバイブル的な存在であるのが、生徒指導提要（文部科学省，2010）である。生徒指導提要には、教育活動全体における生徒指導の在り方について、すべての領域と関連させて事細かに示してある。しかしながら、

生徒指導主事等の役割を担っている人を除き、すべてを熟読する時間を割くことは難しいというのが、おそらく多くの教員の現実であると推察される。しかし、これから教師を目指す学生には、少なくとも確認しておいてほしい、3つの柱となる内容を示すこととする。まず、1つ目は、大前提の生徒指導の意義についてである（資料2）。ここで、前述した課題とも関係してくるところであるが、多くの学生が、「恐れと悲しみ」を抱いていた生徒指導は、本来、有意義で興味深く充実したものになることを目指しているという点は、確認しておきたい。実際に、どのような教材を用いて、どのような場を設定して、興味をもたせた生徒指導を展開できるのか、教師の力量が問われるところであろう。のちに具体的な案を示すとする。

2つ目は、前述した学習指導要領（資料1）の背景にある大事な考え方といえる「教育課程における生徒指導の位置付け（資料3）」に示してある、生徒の自己指導能力の育成を目指すための3つ（①自己存在感を与える②共感的な人間関係の育成③自己決定の場を与え自己の可能性の開発の援助）である。これは、日々の教育活動において是非とも教育実践を開発する際の柱としたい理論であると言えよう。

そして、3つ目は、集団指導と個別指導の方法原理（次頁資料4）として特に、「成長を促す指導」「予防的指導」「課題解決的指導」の3つの指導目的を押さえておきたい。前述した、多くの学生が印象として残っている生徒指導のほとんどが、服装検査などの「予防

1. 生徒指導の意義

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。

（資料2）生徒指導提要（平成22年）

第1章第1節「生徒指導の意義と課題」より引用

1. 教育課程の共通性と生徒指導の個別性

生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意することが求められています。

（資料3）生徒指導提要（平成22年）

第1章第2節

「教育課程における生徒指導の位置づけ」より引用

的な指導」と問題が起こったあとの個別指導や集会などで集団指導として行う「課題解決的な指導」の目的で行われた生徒指導であったといえよう。「予防的な指導」と「課題解決的な指導」の目的で行われる生徒指導が、児童生徒にとって、意義あるものとなるために、何が必要なのか、具体的な実践をもとに次項で検討したいと考える。そして、資料4にも明示してあるように、これら3つの目的をもってなされる生徒指導は、教員による十分な児童生徒理解に基づいてなされること、その指導についての教員間での共通理解を図ることの必要性についてもしっかりと押さえておきたい。その点については、学習指導要領（平成29

年告示）解説総則編でも、「生徒指導を進めていく上で、その基盤となるのは生徒一人一人についての生徒理解の深化を図ることである」とし、その理解においては「生徒（児童）を多面的・総合的に理解していくことが重要である」と明記されている。まさに、問題行動が見られた際、個性の伸長を促す対応につなげるための見極めが存在し、児童・生徒を多面的・総合的に理解することがとても重要となる。生徒指導が充実したものになるかどうかのこの生徒理解の深化の度合いによるといえよう（川上，2020）。

以上のことから、これら3つの柱を踏まえた具体的な生徒指導の実践について、筆者の事例をもとに整理、検討を行うこととする。

4. 生徒指導の実際～具体的な事例検討

前項で述べてきた3つの柱を踏まえ、筆者の中学校での事例を整理し、生徒指導の充実を目指した実践の在り方について具体的な検討を行う。生徒指導の充実を目指すにあたり、前項で述べてきた、3つの柱に含まれた内容の中で、教育実践を整理したり、構築したりすることができる理論として、具体的に次の7つを設定した。【自己存在感】【自己指導能力の育成】【自己決定の場】【自己の可能性の開発の援助】【共感的な人間関係の育成】【生徒理解の深化】【教員間の共通理解】

これら7つをもとに、筆者の実際の中学校における生徒指導の教育実践にあてはめ、生徒指導の充実を目指した視点として、整理・検討を行う。つまり、実践に理論を意味づける作業を行い、理論と実践の往還を試みることとする。整理・検討を行うにあたり、「予防的な指導」「課題解決的な指導」「成長を促す指導」の3つに分類して表を作成し、さらに「個別指導」「集団指導」の2つの指導の場に分けて、実践の整理を行うこととする。ただ、一つ押さえておきたいことは、あまりに多様な生徒の状況が存在し、そのすべての場

1. 集団指導と個別指導の意義

集団指導と個別指導については、集団指導を通して個を育成し、個の成長が集団を発展させるという相互作用により、児童生徒の力を最大限に伸ばすことができるという指導原理があります。

そのためには、教員は児童生徒を十分に理解するとともに、教員間で指導についての共通理解を図ることが必要です。

なお、集団指導と個別指導のどちらにおいても、①「成長を促す指導」、②「予防的指導」、③「課題解決的指導」の三つの目的に分けることができます。

(資料4) 生徒指導提要（平成22年）

第1章第4節

「集団指導・個別指導の方法原理」より引用

中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察
 ー理論と実践の往還の視点による事例検討ー

合を一覧表にすることは当然不可能であるため、典型的な状況を選択し、事例を紹介することとする。

「予防的な指導」 場面	個別指導の具体例	集団指導の具体例
・朝の会が始まるまでの時間帯 (個別・集団ともに) 【生徒理解の深化】	・朝の表情は、家庭での状況の変化や体調などを把握するヒントを得やすい。気になる生徒は近くに呼んで、声をかけたり、体調や心の異変がないかを確認をしたりする。何気ない声掛けから、生徒は、ちゃんと見てくれていると感じ、安心感を得る。 【自己存在感】	・挨拶をしながら集団の様子を観察し、生徒理解の深化を図る。朝の登校状況や学級、廊下での過ごし方から、集団の実態を把握する一つの指標となる。
・長期休暇前の指導	・目標などの設定、各自、計画表の作成。作成後の確認、個別対応。 【自己決定の場】 問題行動や長期休業で生活リズムを崩しやすい生徒へは個別に定期的な電話連絡を行う。 【自己存在感】	・春休み、夏休み、冬休みの過ごし方について、プリントを配布しつつ、全校、学年集会、学級で特に注意すべき事項について説話。 【教員間の共通理解】
・校外学習の事前指導 ・宿泊を伴う行事の事前指導	・宿泊を伴うことで、不安の強い生徒、身体的ケアが必要な生徒などは保護者とも連携をしつつ、個別に配慮事項の確認。アレルギーの有無など念入りに確認。 【自己存在感】	・集団で行動する際の注意事項、時間厳守、持ってくるものの確認、不要なものをもってこない等の約束事の確認。前日、当日、こまめに集会を開き確認。 【教員間の共通理解】

「課題解決的な指導」 場面	個別指導の具体例	集団指導の具体例
校内・外で問題行動が見られた場合 (個別・集団ともに) 【教員の共通理解】 【自己指導能力の育成】	他の教員と連携しながら、本人の動機、その問題行動の背景をしっかりと理解することを心掛ける。気付きを促す。 【自己存在感】【自己決定の場】【自己の可能性の開発の援助】【生徒理解の深化】	一部の生徒の問題行動であっても、全体で考えることで集団を育む。個人にとっても自治力の高い集団が抑止力になるというねらいから、集会を開いて、教師の説話の場をもつ。ただし、一方的な場とならないように、生徒たち自身が善悪について考え、個性の伸長につながるような場のもち方を心掛ける必要がある。

上記の「予防的な指導」と「課題解決的な指導」において、「悲しみや恐れ」を抱かせることのないように、例えば、すべての時間を教師が説話をする時間で過ごすのではなく、生徒たち

中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察
—理論と実践の往還の視点による事例検討—

に集団的な決定の場を与えたり、彼らの存在感を高めるために、小グループにして話し合いの場を設定したり、生徒たち自身から集団の一人としてどう行動すべきかの意見を述べさせたりなど、生徒たちを主役とした場を設定することも一つの案だと考える。このように、理論から実践を生み出すことを通して、生徒指導の実践の幅を広げること可能である。

「成長を促す指導」 場面	個別指導の具体例	集団指導の具体例
<p>・朝の会が始まるまでの時間</p> <p>(個別・集団ともに) 【自己存在感】</p>	<p>・朝の取り組みの様子から、生徒たち一人一人の良さを見つけ(宿題の提出状況、ロッカーの整理整頓、過ごし方など)名前を呼んで、褒める。</p> <p>【自己の可能性の開発の援助】 【自己指導能力の育成】 【生徒理解の深化】</p>	<p>・生徒たちが登校する前に、教室に出向き、教室に入った生徒たち一人一人に挨拶をしながら名前を添えて声をかける。</p> <p>・登校の様子、朝の様子から、学級の良さについて、朝の会で伝える。学級集団の向上を伝達する。 (集団の中で個を認める)</p>
<p>・休み時間・昼休み ※自分の学級だけではなく、授業で関わる学級の生徒も含め、 【生徒理解の深化】の時間枠</p>	<p>・教室に落ちているごみを拾ったり、授業の準備を早めに行っていたり、ささやかでも良さを見出し、名前を呼んで具体的に良い行動を伝えて褒める声掛けを行う。【自己の可能性の開発の援助】 【自己指導能力の育成】</p>	<p>・授業が始まる時の学級の様子を観察し、授業への切り替えができていない場合など、集団としてよい部分を全体に伝え、共有することで、学級集団としての自信を高める。【共感的な人間関係の育成】</p>
<p>・給食時間・掃除時間</p>	<p>・自分の役割を果たしているか、協力の状況はどうか、セルフチェックをさせつつ、教師も見守り、良さをその場の声かけや学活ノートなどの個人とのやり取りノートで、フィードバックする。【自己存在感】 【自己の可能性の開発の援助】 【自己指導能力の育成】</p>	<p>・給食準備の時間を計測して学級に知らせ、集団としての協力状況を可視化する。集団としての協力状況を褒め、認め、向上させる雰囲気づくりを行う。掃除の取り組みにおいても、互いに協力できているか、小グループでの互いにチェックしあったり、認めたりする振り返りの時間を確保する。【共感的な人間関係の育成】</p>

中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察
—理論と実践の往還の視点による事例検討—

<p>・授業中 ※道徳・学活における授業において重点的に【自己の可能性の開発の援助】をねらいとした授業展開</p>	<p>・自分の意見をアウトプットさせる場を設定する。ワークシートの準備。【自己決定の場】</p>	<p>・間違ってもよいとする雰囲気づくりを目指す。相手の意見に、うなずいたり、拍手したり、意見を添えたりするなど、何らかの反応を促す声掛けをする。【共感的な人間関係の育成】</p>
---	--	--

5. 成果と課題

今回は、生徒指導提要から7つの理論（【自己存在感】【自己決定の場】【自己の可能性の開発の援助】【自己指導能力の育成】【共感的な人間関係の育成】【生徒理解の深化】【教員間の共通理解】）として設定し、それをを用いて事例への意味付けを行い、整理・検討した。指導の場面を区切って整理しながら、いかに自分自身はその場のとっさの判断で、対応してきたのかを実感した。つまり、ここに挙げたのはほんの一部にすぎず、教師の目線や表情などの些細な動き一つが生徒指導の充実に大きく寄与しているともいえる。その場の生徒の言動から瞬時に生徒理解を行い、それに応じた対応を行う。時を刻む速度で生徒指導を行っているのではないかと個人的には考えている。それゆえに、今回設定した7つの理論だけでは整理できない、他の視点も存在するし、実践に変換すると理論同士の重なりも存在する。例えば、経験とともに身に付く「危険予知」から生まれる「予防的な指導」や個人だけではなく、集団としての自治力を高めるために、「学級集団に決定の場を設定する」などの理論である。本稿においては、実践に理論を意味づけるという操作を通して、実践を整理・検討したが、理論から実践を構築することも可能である。例えば、【共感的な人間関係の育成】という理論から実践を考える際、道徳と生徒指導の融合的視点で授業を展開することができる。または、【自己存在感】【自己決定の場】【共感的な人間関係の育成】という3つの理論から、学級活動の時間をつかってペアワークを行う。自分と相手の良さを根拠と共に1つ見つけ、お互いの見つけた良さが合致するのかどうかといったグループエンカウンターとして実践可能な「成長を促す生徒指導」としての実践を構築できる。生徒指導の中でも、特に「成長を促す指導」は、今後の生徒指導において、教師がさらに意識して実践を行う必要があると考える。と同時に、これまで重点的に行われている「予防的な指導」と「課題解決的な指導」の在り方については、一方的な説話で完結させていないか、立ち止まって振り返る必要があることも述べておきたい。そして、生徒指導を受けてきた児童生徒が、生徒指導を通して、自分自身の成長を実感できる教育実践を目指す中で具体的にどのような手立てが必要か、一つ提案できるとすれば、一つ一つの実践を「意識化」ということだけで変容してくるのではないかと考える。おそらく、多くの学校現場で「成長を促す生徒指導」は日々実践されている。一方「予防的な指導」と「課題解決的な指導」はおそらく多くの教師が「生徒指導」という「意識」で指導を行っている。つまり、「成長を促す指導」においても、これこそが生徒指導の主軸であるという意識をもって実践する教師が増えること、また、「予防的な指導」や「課題解決的な指導」の際、生徒たちに「自己決定の場」を設定したり、「自己の可能性の開発」を意識した場の設定を行ったりするなど、生徒指導に携わる側のほんの少しの意識の変容が、生徒指導の充実をもたらすのではないかと期待している。わくわくしながら生徒指導に行う教師が増えること、

中学校における生徒指導の具体的な教育実践における考察
—理論と実践の往還の視点による事例検討—

それが何よりの近道ではないかと考える。しかしながら、こういった意識の有無が、実践への影響をどれほど左右するのか、個人的な実感レベルの考えにすぎないため、客観的な実証に基づきその効果を明らかにする必要があると考えている。また、本稿は、筆者の事例を踏まえて主観的な整理・検討に留まっており、当然ながら客観的根拠に乏しい点は大きな課題である。ただ、このような事例検討を重ねることを通して、自身の実践を振り返ること、生徒指導の充実を目指した教育実践とはどのようなものか改めて検討すること、そして、「自分自身はどのような生徒指導を行うのか」そういった自問自答に、まずは大きな価値があり、その中で実践は繰り返され改善されていくものだと考える。

【引用・参考文献】

川上知子 (2020). 生徒指導とキャリア教育の充実を目指した授業の在り方の考察—融合的視点による実践事例を通して—, 教育研究実践報告誌 3(1), 27-34.

文部科学省 (2010). 生徒指導提要

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/__icsFiles/afieldfile/2018/04/27/1404008_02.pdf (最終閲覧日: 2020年8月30日)

※資料1～4の引用ページ, 1, 5, 14.

文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 総則編 東洋館出版社, 57-58.

文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説 総則編 東洋館出版社, 99-100.

文部科学省 (2018). 中学校学習指導要領解説 総則編 東山書房, 97-99.

文部科学省 (2019). 平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>
(最終閲覧: 2020年8月30日)

※フリーソフトによる解析

AI テキストマイニング 株式会社ユーザーローカル

<https://textmining.userlocal.jp/> (最終閲覧: 2020年8月30日)